



1969年(昭和44年) 東大安田講堂事件

明治 大正 昭和 平成

「陥落」から50年 闘いは続く

1969年1月、学生たちがバリケードで封鎖して立てこもった東京・本郷の東大安田講堂が「陥落」した。大学紛争が激化する中、機動隊と攻防戦を繰り広げた安田講堂事件で日本はひとつの曲がり角を迎えた。あの熱狂と挫折の季節から50年。東大共闘の元学生たちはどんな人生をたどってきたのか。

この1月、安田講堂で在宅医療のシンポジウムがあった。登壇者は「あの日から50年」の思い出を語った。「ほーっと生きてなんかいないよな」。休憩中に流行語をまじり、語り合う人もいた。

入に反対する医学部学生や研修医らは無期限ストに入った。医局長を拘束したとする3月1日の処分発表にも、学生らは不当処分だと反発した。6月には医学部学生らが安田講堂を占拠。長田博昭・聖マリアンナ医科大学名誉教授(76)は各大学医学部OBの全国組織、青年医師連合(青医連)の東大メンバー。2晩議論して全学に訴えようとなり、20人足らずで実行した」と語る。2日後に大学側が機動隊を導入。「大学の自治を守れ」との声が広がった。7月に全学共闘会議(東大共闘)を結成。10月には全学無期限ストに至った。

一方、日本共産党系の日本民主青年同盟にも一定の支持があり、11月に加藤一郎法学部長が総長代行になると事態収拾を求める声も増えた。69年1月の攻防は学内外の勢力



東大共闘関係の学生らが立てこもった東大安田講堂。機動隊の放水やガス銃に、学生らは投石や火炎瓶で抵抗した=1969年1月

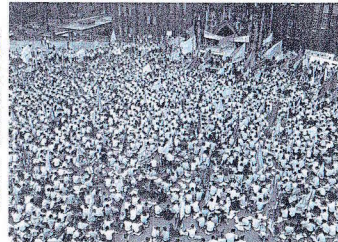
- 東大闘争と東大安田講堂事件
- 1958年 学生らが共産主義者同盟(プント)結成。60年安保闘争で中心的役割を担う大学管理法案反対闘争
- 62年 一部大学で学費値上げ反対闘争など
- 65年 青年医師連合(青医連)結成
- 66年 佐藤栄作首相外遊阻止を掲げた羽田闘争
- 67年
- 68年 1月、東京大学医学部で無期限スト。3月、東大医学部で学生ら17人の処分発表。5月、日大全学共闘会議(日大全共闘)結成。6月、東大安田講堂封鎖を機動隊が解除。7月、東大共闘結成。10月、東大で全学無期限ストが成立。11月、大河内一男東大総長辞任。加藤一郎法学部長が総長代行に1月18日～19日、安田講堂で攻防戦。同日、東大入試中止が決まる。8月、大学の運営に関する臨時措置法公布。9月、東京・日比谷で全国共闘連合結成
- 70年 日米安保条約が自動延長。この頃から革マル派、中核派などの内ゲバ激化
- 72年 連合赤軍の浅間山荘事件

がせめぎあう中で起きた。1月18日朝から警衛隊約8500人が構内に入り安田講堂を囲み、19日夕方まで攻防が続いた。機動隊の催涙液の放水やガス銃に学生らは投石や火炎瓶で抵抗、負傷者多数、逮捕者6000人余を数えた。

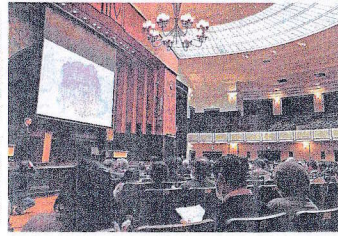
60年代、米国では公民権運動が盛んになり、国内外でベトナム反戦やバリ五月革命、成田闘争の動きがあった。堂垂さんは「常識や権威を疑い、医療制度を含む社会のあり方、物事の本質を根源的に問おうとする。『主張し、行動する大量の若者たち』だったと振り返る。

「敗北感があった。70年安保に向けて必然的に大学内の問題から学外の政治権力闘争に移っていった」と語る堂垂伸治医師(71)は、1月のシンポジウムを主催した。工学部航空学科の学生で、当日はデモに身を投じた。

安田講堂の学生側防衛隊長、故今井澄医師(元参院議員)は地域医療も主導した。堂垂さんは「在宅医療は社会運動だと思ってるやっつて。取り組むは現在の国の介護制度に結実している」と話す。助手共闘の窓口的役割を担



学内への機動隊導入に抗議し、東大安田講堂前に集まった学生は約6千人とも7千人ともいわれる。1968年6月



医師の堂垂伸治さんが東大安田講堂で開いたシンポジウムで2019年1月、東京都文京区

全共闘を教訓に「個」が動いた

安保法制反対を訴えた元SEALDsのメンバー

林田光弘さん(26)



2015年から翌年にかけて安保法制に反対する街頭活動などに取り組んだ。学生団体「SEALDs(シールズ)」は立憲主義と民主主義を守ることを「個」の集合体。全共闘運動や新左翼の教訓から暴力や排除はしない、上意下達の組織運営も

しない方針でした。逮捕者が出るれば過激派扱いされ、安保法制の問題が伝わらない。リアリズムからの非暴力でした。無関心層にもメッセージを届けるため、メディアと呼びかけた。活動を意識しましたが、自分たちの勉強と行動を心がけました。

2015年から翌年にかけて安保法制に反対する街頭活動などに取り組んだ。学生団体「SEALDs(シールズ)」は立憲主義と民主主義を守ることを「個」の集合体。全共闘運動や新左翼の教訓から暴力や排除はしない、上意下達の組織運営も

つた最前線、和光大名譽教授(88)は「きわめて原始的な異議申し立てと聞いかけ。何か明確な目的があったわけではない」「壮大なゼロ」と言う。予備校講師の傍ら助手を27年間。障害がある娘の親として、相模原市の障害者施設で起きた殺傷事件の被告の手紙に神奈川県新聞紙上で答える連載が続く。「学問をひっくり返した知的な営み、『問学』を問い続ける」

全共闘世代はいま医療や介護に直面している。1月のシンポジウムに登壇した医師・作家の鎌田實さん(70)は、今井医師の志を継いで長野県の諏訪中央病院で地域医療に取り組みで来た。「僕たちはまだ土俵を割っていない。これからが勝負」。堂垂さんは、アンケータを募り四半世紀ぶりに「全共闘白書」の続編を出版する企画にも参加している。小杉亮子氏の「東大闘争の語り」など関連の出版も相次ぐ。教養学部助教だった折原浩・東大名譽教授(88)は「東大闘争総括」を出版。争点の医学部や文学部の処分問題について大学と全共闘双方の主張を検証した。「当局が事実誤認を認め、処分を白紙撤回すれば機動隊導入も入試中止も避けられたはず。事実関係にさかのぼる議論や個人の意見がない。そういう集団同調性が今も問われている」

「歴史としての東大闘争」を出した富田武・成蹊大名譽教授(76)は、東大闘争の特徴を「全共闘元代表の山本義隆氏など、経験も理論もある年長者の役割が大きい。党派勢力の拮抗も、党派に属さないノンセクト・ラジカルな指導を可能にした」と語る。「入試中止など多々の人の人生に影響があった。自分はどうしてきたと正直に語るしかない」。今の思いだ。(大内博史)